



## 佳作

書評 辰濃和男著『文章の書き方』（岩波書店 1994年）  
（中央新書・文庫コーナー：岩波新書 新赤版 328 ほか）

商学部3年 古場涼太

机に座り文章を書く。そのとき人は頭の中であれや、これやと考える。そして一行書いては消し、また一行書いては消す。ああでもこうでもない悩んでいるうちに気づけばスマートフォンをいじっている。

本書はそんな経験のある方に薦めたい一冊である。

朝日新聞のコラム『天声人語』を長年担当していた著者が「文は心である」という信念を元に、文章の書き方について述べる。

そのため本書は、素材の発見、文章の基本、表現の工夫と大きく三つの章に分かれてはいるものの、そこに示してあるのは、技術論というよりむしろ、文を書くにあたっての心構えが中心となっている。そして、それらどの部分から拾い読みしても、理解できるよう分かりやすく書かれている。

例えば、著者はものの見方において「大切なのは白紙の心である」と述べた後、このことに関連した自身の体験へと続けている。

母一人で、三人の子供を育てる開拓農家に取材へ行った時のこと。著者がその子供らを写真に撮りたいと母に伝えると、母は晴着を出してきて子供らに着せてやる。より悲惨な現実を映したい彼はそのことを不満に思う。

しかし、時がたち、彼は思う。「ありのままとは何か。垂れ流しの部屋も現実ですが、新聞に載るときはせめて見苦しくない服を着せてやりたいという母の心も現実でしょう」あの時もっと無心で取材をしていれば、その母の心をもっと掘り下げて書くことができただろうと。

事実をより正確に、慎重に扱わなければならない記者としての自身の体験を通すことで、ものごとを先入観なしにみる重要性を、説得力をもって読者に伝えることができる。ここが本書の特筆すべき点の一つであると、私は思う。

そして本書にはもう一つ特筆すべき点がある。

それは、文章の手本として登場する人物の数である。本書のなかには百人以上の人物が登場する。福沢諭吉を筆頭に、井伏鱒二などの作家はもちろん、詩人、学者、ジャーナリスト、コピーライターなど多岐にわたる。さらには、画家の熊谷守一や沖縄の古武道家のような物書きを専門としない人達も取り上げ、彼らの言葉、生き方を紹介している。

様々な分野の、多くの人物を、文章の書き方という観点からみていくことで、読者は日常の様々な行為と文章を書く行為の間にあるつながりを実感することができるだろう。

「文章の修行をするということは机の前に座ったときにはじまるわけではないのです。いい文章を書くことと、日常の暮らしの心のありようとは深いつながりがあります。」

何気ない日常生活への意識一つを変えれば、スマートフォンを見ているその瞬間から、文章修行は、

はじまるのである。